
我が家には、五匹の娘たちがいるんです。

ツダヨシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が家には、五匹の娘たちがいるんです。

【Nコード】

N0331W

【作者名】

ツダヨシ

【あらすじ】

ツダヨシを癒して止まない、愛猫たちについて綴ってみました。

日記のようなものです。お暇なときにでもどうぞ。

古株さんについて

我が家（実家）には、五匹の猫がともに暮らしております。

今年で十二年目になる古株の子もいれば、今年の五月にとある事情でやって来た新入りさんもいます。人間、一人一人が異なるように、五匹の娘たちにもそれぞれ個性があるのです。

まずは、一番年上の子を紹介しましょう。名前は『りんご』です。名前の由来は不明。ほつぺたが赤いとか、毛の色が赤いなどの特徴は一つありません。どこからどう見ても日本猫（キズ猫）です。では、何故この名になったのか？ その答えを知るためには、名付け親である我が妹の頭の中を調べる必要があります。しかし、彼女の思考回路は、私のような凡人には理解することができないので、聞くことは止めようと思います。初めは違和感を感じていましたが、もう、『りんご』と言う名が染み付いていますし。うーん、慣れとは恐ろしい。

先ほども述べましたが、この子は、我が家にやって来て今年で、もう十二年になります。

私が今年で二十二歳ですから、小学四年生の頃からの付き合いになりますね。考えてみると、長いものです。人に例えたならば、彼女は七十歳を過ぎたぐらいでしょうか。間違いなくお婆さんです。

最近、大事な歯が一本欠けてしまったらしく、食事が流動食のよなものになっていました。

「ちよっ、何か、どろどろしてるよ！」

缶詰め（キャットフード）の中身について聞かされていなかった私。それは、大いに驚きましたよ。完璧な保存状態であるはずの缶詰が、夏の暑さでついにやられてしまった、と。

人と違い、見た目から年を判断することができないため、流動食

（薄い橙色でとろみのついた液体）を美味しそうに舐める、りんご姉さんを見たときには、「ああ、思っていた以上に年を重ねていたんだ」と少し悲しくなりました。当り前のことなんですけどね。

リンゴ姉さんは、もともと捨て猫でした。寒さ厳しい十二月に、私たちは出会いました。

彼女の兄（弟かもしれない）である、今は亡き『コロン』が勝手に家の中へと上がり込んで来たことが始まりです。強引な行動と、必死さの滲み出ている彼の鳴き声に、渋い顔をしていた父も彼らを飼うこと許すしかない状況でした。

甘えん坊のコロン君と違い、リンゴ姉さんは人見知りで、懐くまでに時間が掛かったものです。一緒に寝てくれるようになった時は、本当に嬉しかった。

——飼っていたハムスターを啗えて持ち去ろうとしていた彼女を見つけた時は、こっ酷く叱りましたが……。

穏やかな性格の反面、喧嘩では負けたことのない圧倒的な強さを誇っていたコロン君が、病気で天国へと旅立って四年、変わることなくリンゴ姉さんは傍にいてくれます。以前ほど外へ出かけることもなくなり、一日の大半は家の中でのんびりと過ごしています。時々、目上の者に対して無礼にも手を出してくる新入りへの教育（喧嘩）も忘れていません。

そんな私が、心から望むのことは一つだけ。リンゴ姉さんと過ごす時間が、少しでも長く続いて欲しい。実家に帰って、彼女から「帰って来たのか、おかえり」と迎え続けてもらいたいのです。

しかし、リンゴ姉さんは、そう思っていてくれるのか？

あんまり深く考えないようにします。私は愛してますからね！
片思いでも良いんです。

本当はちょっと悲しい、ですが。

> i 2 9 6 5 5 — 3 4 6 2 <

問題児なんですよ

次に紹介する子は、『小町』です。名付け親は、例のごとく我が妹です。まあ、リンゴ姉さんよりは、まだましだと思います。美人……と言えば、美人ですかね。鼻の下についた黒い点のような模様によって顔の良さが半減している気がします。親は、そこが良いと思っっているらしいですが。

この子も、捨て猫でした。母が、ウォーキング中の公園で見つけてそうです。小町が、我が家に来た時、私は大学二年生でした。妹からのメールで（写真付き）新たな家族について知らされました。彼女の余りの小ささと可愛らしさに、身悶えした覚えがあります。ああ、あの頃は素晴らしかった。

小町は、我が家で暮らした歴代の猫たちの中で、誰もしたことがないことをやり遂げた子です。

それは、何か？ 答えは、出産でございます。猫は一回に付き、多くて六匹ほどの子供を産んでしまうため、面倒を見切れないなどと無責任なことにならぬよう、我が家では避妊することが決まりました。

小町も、そろそろ六カ月が過ぎたし、病院に連れて行かないとね、と言っていた矢先だったそうです。

まさかの妊娠発覚。見事、四匹の子供の親となったのです。

小町の育児生活。それは、それは、素敵なお母さんでした。昼間は、子供たちを外で元氣よく遊ばせ、夜になったら仲良く眠る。時にはネズミを捕まえ、子供たちにプレゼントするほどの溺愛ぶり……だったのですが。

幸せって、続きにくいものなのでしょうか？ 一年が経ち、大人の猫へと成長を遂げた自分の子供たちに何故か、彼女は威嚇をするようになったのです。終いには、家の中で一緒に眠ることもなくな

ってしまいました。ふらりと立ち寄っては、外へ出て行く、そんなことを繰り返す、家出猫。

獣医さん曰く、猫は本来一匹で生活する生き物であって、犬のように群れないそうで、縄張りを取られたと勘違いしてしまっているらしい。

最近では、向かいの家に入り浸っているようで、住んでいるお婆さんから、小町ではなく、クロと言う名で可愛がられているんだと母から聞いた時には、笑いが止まりませんでした。流石、猫だ、勝手気ままな生活を謳歌していると、感心してしまいましたよ。そんな風に、堂々と浮気をしている小町ですが、食事だけは我が家で頂くと決めているようで、夕食（たまに朝食）時には、いそいそと走って帰ってくるのです。そして食べ終わったら、そそくさと外へと消えて行く。

うーん、もやもやした、言い表しにくい感情が胸の内に残りますが、我が家に顔を出すのは、家族の一員だということの表れと考えるても良いですね。手のかかる子ほど、可愛いと言いますから。

> i 2 9 6 5 4 — 3 4 6 2 <

姉妹について

今回は、同時に二匹紹介しますね。

小町の子供である、『小梅』と『小春』です。

時代劇に出てきそうな名前をつけられたもんだと思います。おつと、この子たちの名前の提供者は私だった。いけない、いけない。危うく妹のせいにするところでした。一応謝ります、ごめんなさい。可愛い名前じゃないですか？ 親から一文字もらってるし。間違ったことはしてないと思うのですが。

はい、一旦、名前のことは忘れましょう。この姉妹、明らかに性格が違います。

では、まず小春さんについて。彼女を一言で表すなら、そうですね、『動かざること山の如し』ですかね。そのままです。一日中、ごろりと身体を横たわらせています。畳の上であったり、フローリングの上、時には箆笥の上で寛いでいます。外に出るといいう行為があまり好きではないようです。

かなり穏やかな性格で、甘え上手な子であります。成されるがまま、微動だにしないという特技も持っていますよ。そんな、小春でも「ちよつと、姉さん。やりすぎだよ」と感じた時は、短くはつきりとした鳴き声で拒否の意を示してきますが、滅多に噛んだり、爪を立てることがありません。家にやって来たお客様方に対しても、愛想良く対応してくれる良い子です。

ただ、やはり少々太り過ぎていることが、玉に傷でしょうか。重いなと感じてしまうことが増えた気がします。まだ、うら若き乙女のはずなのですが、出不精ですからね。困ったものです。

> i 2 9 6 5 3 — 3 4 6 2 <

一方、小梅はんについて。彼女は『小心者』です。

常に、何かしらビクついています。ノミのような心臓を持つてしまった子です。

人見知りの激しさは天下一品で、数か月間会っていなかった私に對する、態度は……酷いものでした。物陰の間から、ちらちらとこちらの様子を窺っているくせに、近付くと脱兎のごとく逃げ出し、新たな隙間へとその身を隠すのです。

さすがに一年以上の付き合いから、やっと顔を覚えていてくれたようで、今年の夏は逃げられはしませんでしたが。

一度慣れてしまえば、ゴロゴロと喉を鳴らしながら、身体をすり寄せ甘えてくるのですが、そこまでの道のりが異様に長い。

警戒心がペラペラに薄い小春に、警戒心の塊のような小梅。どちらも同じ母親から生まれてきたのに、ここまで違うのかと不思議に思っています。

小梅は、五匹の中で最もよく鳴き声を上げる子です。ご飯を食べる時、外から帰って来た時、頭を撫でてもらった時など、些細なことに対して必ず返事をするのです。可愛い声だなと思うのですが、その鳴き声のせいで、最近大変な目に会っています。詳しくは次回お話しますね。最後の一匹が関与していますので。

> i 2 9 6 5 2 — 3 4 6 2 <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0331w/>

我が家には、五匹の娘たちがいるんです。

2011年8月23日03時31分発行